

世界遺産「ノイシュヴァンシュタイン城」

～芸術を愛したバイエルン王国・ヴィッテルスバッハ家～



世界的な観光地として日本人にも人気の高いノイシュヴァンシュタイン城が、今年の7月にパリで開催された第47回世界遺産委員会で、世界遺産に登録されました。「今さら、世界遺産に登録？」と思った方、あるいは、「当然、もう既に世界遺産だったと思っていた」という方もおられたでしょう。パリの凱旋門やナイアガラの滝と同様に、世界遺産に登録されていると誤解されやすい世界的な名所でしたから、仕方がありません。ノイシュヴァンシュタイン城は、1869年に着工されましたが、1886年のルートヴィヒ2世の死によって未完成のまま工事が中断され、現在に至っています。19世紀になって中世の姿を再現したこの城には、エレベーターや電話が備えられており、中世のロマンを期待する観光客を少しがっかりさせるような造りであることは否めません。明治時代にあたる時期に、時代錯誤とも見える城を築こうとしたルートヴィヒ2世への否定的なイメージも広がり、商業目的ではないかと軽んじてられてきた風潮が、世界遺産登録を遅らせた一因とも言われています。しかし今回の登録によって、こうしたイメージが大きく見直されるのではないかでしょうか。観光客の視点や捉え方にも、変化が生まれることでしょう。世界遺産としての登録名は『バイエルン王ルートヴィヒ2世の宮殿群:ノイシュヴァンシュタイン城、リンダーホーフ城、シャツヘン城、ヘレンキームゼー城』です。

つまり、ノイシュヴァンシュタイン城は、単独で世界遺産に登録されたのではなく、4つの宮殿からなる構成資産のひとつなのです。あまりの知名度ゆえに、その名がひとり歩きしていたと言えるでしょう。

そして、これらの物件の登録には「ヴィッテルスバッハ家の芸術への熱い庇護」が大きくかかわっているのです。

■ルートヴィヒ2世とノイシュヴァンシュタイン城

ノイシュヴァンシュタイン城を築いたのは、ヴィッテルスバッハ家の系譜を継ぐルートヴィヒ2世(1845年~1886年)です。彼は、ミュンヘン郊外のニンフェンブルク城で生まれ、幼い頃から芸術性に富んでいました。16歳の時に、ミュンヘンのレジデンツ(ヴィッテルスバッハ家の本宮殿)内の劇場で、リヒャルト・ワーグナー(1813年~1883年)の作品を観劇したことを機に、次第にワーグナーへ傾倒。24歳の時にノイシュヴァンシュタイン城の建設に着手しました。



ルートヴィヒ2世（1864年撮影）



バイエルン王国の紋章

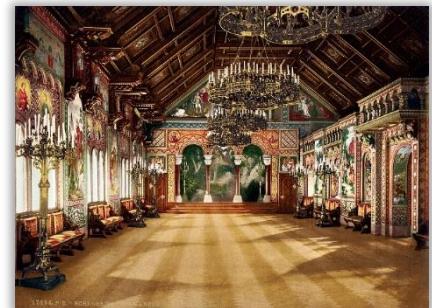


フュッセンの街並み

ノイシュヴァンシュタイン城への訪問は、ツアーリ利用と個人旅行のどちらでも可能です。個人旅行の場合は、ミュンヘンから列車の利用が便利で、約2時間でフュッセンに到着します。フュッセンはロマンチック街道の終点または起点として知られている街で、駅から数分歩くとバス停があり、そこから約10分で城の麓の街、シュヴァンガウに到着します。入場券を購入し、観光馬車や徒歩で城の入口へ向かいます。場内は、原則として、ガイドツアーでの見学となります。主な見どころは、金色に輝く「玉座の間」、世界遺産「ヴァルトブルク城」をモデルにした豪華な歌人の広場、石膏で造られた人工の洞窟の3つが挙げられます。場内の随所に、ワーグナーの「タンホイザー」と「ヴァルトブルクの歌合戦」をテーマにした絵画が飾られています。ちなみに、ヴァルトブルク城は、ドイツ中部アイゼナハ郊外に在る中世城郭で、ノイシュヴァンシュタイン城のモデルのひとつとされています。ワーグナーは、ヴァルトブルク城を舞台とした騎士タンホイザーを主人公とする歌劇を作詞・作曲し、上演しました。宮廷の騎士団たちの詩歌による「歌合戦」が繰り広げられる、全3幕の構成となっています。この歌劇を理解することは、ガイド説明の理解への手助けとなるので、補足しておきます。ノイシュヴァンシュタイン城は、ルートヴィヒ2世のワーグナー芸術への憧れが投影された、“芸術の城”そのものなのです。実際に城内を巡つてみると、「タンホイザー」を中心とする物語世界で構成されていることがよく分かります。源流であるヴァルトブルク城が世界遺産であることを踏まえると、ノイシュヴァンシュタイン城が世界遺産に登録されたことも納得できます。展示されている絵画作品は細部まで精緻で、装飾絵画というより、芸術作品と呼ぶに相応しく、これだけの絵画を描くだけでも、相当なエネルギーと技量が必要です。せっかくなら、時間をかけて鑑賞したいところです。なお、この城を後にして、さらに15分ほど登ると、絶景スポット「マリエン橋」があります。この小さな吊り橋からノイシュヴァンシュタイン城を真横から眺める光景は圧巻ですので、ぜひとも訪れてみてください。



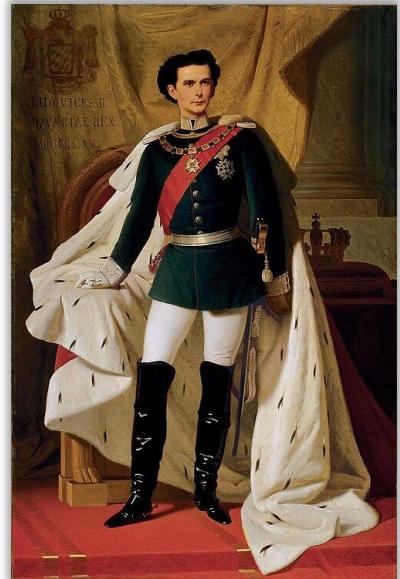
玉座の間



歌人の間

■ルートヴィヒ2世の肖像画

ルートヴィヒ2世の肖像画と言えば、この作品でしょう。意外にも作者はあまり知られておらず、ドイツの肖像画家フェルディナンド・ピロティ(1828年頃～1895年頃)が1865年前後に制作したものです。同姓同名の父も兄も画家という芸術一家に育ちました。画面中央に凛々しく立つ王の姿は、自信に満ち、今まさに踏み出そうとする瞬間を見事に捉えています。ルートヴィヒ2世を描いた作品は多くありますが、最も勇ましく若々しい作品だと思います。赤い床と黒いブーツ、対照的な白いズボン、濃紺の服に赤い襷、背景の黄土色と白の組み合わせ。全体が「赤・青・黄の三原色と白黒」で構成され、色彩の対比、力強さが際立つ名画です。この作品は、世界遺産「ヘレンキームゼー城」内に在る「ルートヴィヒ2世博物館」に所蔵されています。



『将軍の制服を着たルートヴィヒ2世の肖像』

フェルディナント・フォン・ピロティ
1865年／ヘレンキームゼー城所蔵

■ヴィッテルスバッハ家の功績

ヴィッテルスバッハ家は、12世紀半ばから約700年にわたり、現在の南ドイツ・バイエルン地方を支配した名門王家です。ミュンヘンのレジデンツ(宮殿)を居所として、「音楽・絵画蒐集・建築」の3分野で大きな功績を残しました。

【音楽】

ミュンヘンには、バイエルン州立歌劇場があり、ルートヴィヒ1世の時代である19世紀前半に建設されました。ワーグナーの『ニュルンベルクのマイスター・インガー』が初演されたことでも、知られています。また、北部バイエルン、音楽の都・バイロイトは、ワーグナーゆかりの地で、ワーグナーが設計に携わった「バイロイト祝祭劇場」や、2012年に世界遺産となった「^{ヘンケル}辺境伯歌劇場」があります。こうした文化基盤があったからこそ、ルートヴィヒ2世がワーグナーに傾倒したのは自然な流れだと言えます。

【絵画蒐集】

16世紀以降、ヨーロッパ各地の名画を蒐集し、1836年にはミュンヘンに「アルテ・ピナコテーク」を建設。レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロ、デューラー、ブリューゲルらの名画が収蔵されています。続いて、1853年には、18世紀以降の絵画を中心とした「ノイエ・ピナコテーク」も建設し、モネやゴーギャンなど印象派の作品やドイツ近代絵画などが展示されました。「ピナコテーク」は、ドイツ語で絵画館や美術館のこと。「アルテ」は「古い」、「ノイエ」は「新しい」という意味です。ドイツを代表するこの2つの美術館は、いずれも、ルートヴィヒ2世の祖父であるルートヴィヒ1世の事業です。ノイシュヴァンシュタイン城を飾る作品の題材は100年以上遡ったもので、これらの蒐集品は、画家たちの技量向上にも大きく貢献しました。



アルテ・ピナコテーク



ノイエ・ピナコテーク

【建築】

ミュンヘンのマリエン広場には、1867年頃から約40年をかけて建設された壮麗なネオゴシック建築の新市庁舎があります。ミュンヘン近郊のニンフェンブルク城は、ヴィッテルスバッハ家の「夏の宮殿」として知られるバロック建築の傑作で、ルートヴィヒ1世が造らせた「美人画ギャラリー」は必見です。ヴィッテルスバッハ家は南バイエルン地方にも多くの城を築きました。

世界遺産「リンダーホーフ城」は、ロココ芸術とバロック芸術が融合した華麗な宮殿です。ワーグナーのタンホイザーをイメージした人工洞窟もあり、ルートヴィヒ2世の想いが凝縮されています。世界遺産「ヘレンキームゼー城」は、ベルサイユ宮殿を模した壮大な建築。100m近い「鏡の間」は圧巻。世界遺産「シャッヘン城」は、アルプス山中に建つルートヴィヒ2世の山荘です。そして、世界遺産「ノイシュヴァンシュタイン城」は、セントラルヒーティングや各階への給水設備など当時の最新技術を取り入れた、科学技術の結集した城です。



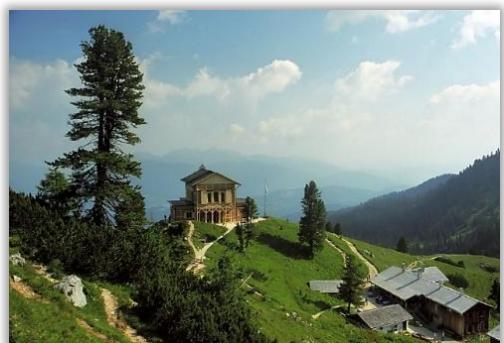
ミュンヘンの新市庁舎



リンダーホーフ城



ヘレンキームゼー城



シャッヘン城

4つの構成資産は、ミュンヘンを中心としたバイエルン州南部に集中しています。今日残る名城の多くは、ヴィッテルスバッハ家の統治期に建てられたものです。芸術を篤く庇護した一族の功績は、今回の世界遺産登録に大きく寄与したと思います。ミュンヘンとバイエルン地方を支配し、芸術を手厚く保護したヴィッテルスバッハ家。その芸術の集大成ともいえるノイシュヴァンシュタイン城が、着工から150年以上を経て世界遺産となったことは、たいへん灌溉深いものです。登録基準は(iv)で主に建築技術が評価されました。文化的・芸術的価値も十分に再評価されるべきだと感じています。いずれにせよ、ノイシュヴァンシュタイン城が世界遺産となったことは、純粋に嬉しいニュースです。

沼田政弘

～ちよこっとコラム～

霧の中に佇むノイシュヴァンシュタイン城は、まさに幻想的です。私は所用で何度か訪れていますが、最初に訪れたのは40年近く前のこと。大学1年生、バックパッカーでした。「この霧の中に佇む姿を、ひと目見たい」という憧れからでした。当時は、今と違って、バックパッカーが容易に辿り着ける時代ではありません。夕方、ミュンヘンからフュッセン行きの列車に乗りましたが、どこかで乗り間違えたようで、知らない駅で途中下車しました。あたりはもう真っ暗で、お店も民家もなく、道が一本あるだけでした。そこへ、遠くから車のヘッドライトが近づいてきました。思わず手を挙げると、幸いにもタクシーでした。タクシーに乗って約30分ほどでしょうか。22時過ぎだったと思います。フュッセンに近づいた頃、遠くの山の中腹で照らされている白い影が見えました。ドライバーさんに尋ねると、「あれがノイシュヴァンシュタイン城だよ」とのこと。暗闇に浮かび上がるその姿は、とても幻想的でした。ライトアップされた城もまた格別です。ノイシュヴァンシュタイン城との出逢い、その時の感動は今も忘れられません。

